

いま、もう一度、死刑を考える ～「デッドマン・ウォーキング」を観て～

先進国各国が死刑を廃止している中で、死刑を固持する日本とアメリカ。

しかし、アメリカでは死刑を廃止する州が徐々に増えている。一方、日本では決して執行の手を緩めようとしなない。オウム真理教の事件も全裁判が終結し、13人の死刑囚の大量執行が囁かれ始めた……。

そこで、いま一度、死刑について考えようと映画とトークの集いを企画しました。

映画は『デッドマン・ウォーキング』（1995年作、監督：ティム・ロビンス、主演：スーザン・サランドン、ショーン・ペン）で、久々の京都上映となります。

トークは、アメリカで実際の執行に立ち会った経験をもつ布施勇如さんを迎え、龍谷大学犯罪学研究センター代表の石塚伸一と、日本とアメリカの死刑制度について、また死刑が社会にもたらす問題点などを対談していただきます。

一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。

2018年 4月 14日（土）

午後1時：開始（12時半：開場）

龍谷大学 **響都ホール**
（八条口 / 京都アバンティ9階）

資料代：¥500
（龍谷大学生は不要です）

主催：龍谷大学 犯罪学研究センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67
TEL. 075-645-2184

京都にんじんの会

お問合せ：090-1711-0710（永井）

いま、もう一度、死刑を考える ～「デッドマン・ウォーキング」を観て～

13:00～ 参考上映「デッドマン・ウォーキング」

ニューオリンズの貧困地区で働くシスター・ヘレン（スーザン・サランドン）は、あるきっかけで死刑囚マシュー（ショーン・ペン）と面会する。仲間と若い男女を惨殺したのが彼の罪状。なぜ共犯者が無期懲役なのかと怒り、罪を見つめず強がる彼だが、対話を重ねる中で変化が現れる。遺族の非難を浴びながらもヘレンは執行回避に奔走するのだが……。

死刑廃止論者であるヘレン・プレジャンの同名ノンフィクションを俳優のティム・ロビンス（『ザ・プレイヤー』『ミスティック・リバー』）が監督を務め映画化した。「愛」「赦し」「遺族感情」「可変性」「司法制度の問題」など、死刑を巡る種々の問題に正面から挑んでいる。本作でサランドンはアカデミー主演女優賞、ペンはベルリン国際映画祭で男優賞に輝いた。

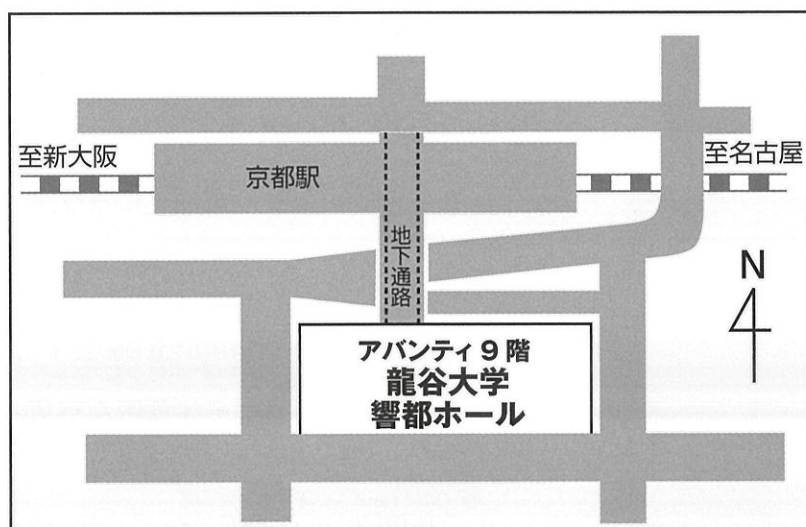
15:30～ 対談：石塚伸一さん＋布施勇如さん

アメリカで実際に薬物による死刑執行を見てきた布施さんと、龍谷大学の教員であり、死刑執行された死刑確定者と交流のあった石塚さんに、対談していただきます。

プロフィール：

布施 勇如（ふせ ゆうすけ） 1966年生まれ。早稲田大学第一文学部卒。アメリカ・オクラホマシティ大学大学院に留学中の2004年、ジャーナリストとしてオクラホマ州の死刑執行に立ち会う。08年に『アメリカで、死刑をみた』（現代人文社）を出版。映画「デッドマン・ウォーキング」の原作者ヘレン・プレジャンとのインタビューも所収している。14年、論文「日米の死刑執行を巡る透明性に関する一考察：絞首刑の残虐性を中心に」で龍谷大学から博士（法学）の学位取得。

石塚 伸一（いしづか しんいち） 1954年東京都生まれ。中央大学大学院法学研究科博士後期課程退学（法学修士）。九州大学法務研究科より博士（法学）の学位授与。龍谷大学法学部教授・犯罪学研究センター長。専門分野は刑事法（刑法、刑事政策）。弁護士。



〒601-8003
京都市南区東九条西山王町 31
アバンティ9階
龍大ホール事務室
TEL:075(671)5670